

古月禪と白隠禪の通路

鈴木省訓

The Relation of Kogetsu-zen and Hakuin-zen

Shokun SUZUKI

平成十年六月、臨済宗建長寺派・円覚寺派合同住職研修会が、伊豆で開催された。『駿河の口に過ぎたるもの二つあり富士の御山に原の白隠』と歌われたように、白隠誕生の地である。そこで鎌倉瑞泉寺の下一真師（円覚寺派教学部長）の依頼で、鎌倉と深い関係にある古月禪と白隠との関係について発表をすることになった。

私は、白隠禪の本質は、室内の公案にあると考えている。古月禪についても、それは同様であるが、古月禪の室内は明治頃を境に断法してしまっている。この様な関係において、この二つの禪の関係について述べることは非常に困難なことである。そこで、白隠禪と古月禪について、古月下、白隠下諸師の伝記によって古月禪と白隠禪について述べることにする。それによって白隠禪、古月禪の本質に少しでもふれることができればと考えた。

大学の研究紀要には『古月録』の整理をすることになっていたが、『古

月録』の復刻を、他の所で行うことが決ったため、紀要には、本論文を発表することにする。

尚、発表ということで、日本禅宗史の概要も述べることにする。

（一）臨済禪の展開

禅宗には、達磨が日本に渡来したという伝説がある。『日本書紀』の推古天皇即位二十一年の条に、聖徳太子が大和片岡に遊行された時、道の傍らに乞食が寝ていた。それを憐れに想い、食べ物を与え、寝ている乞食に自分の衣服を掛けて帰宅した。太子はその乞食のことが気に入り、使者に見に行かせた所、すでに死んでいた。それを太子が聞かれ、悲しまれてそこに埋葬したのである。その後、側近の者に語って言うのに、あの乞食は、凡人ではないであろう。そして使者を使わし、

見に行かせた所、棺桶の上に太子の与えて衣服がきちんとたたまれて置いてあったという。太子はその衣服を取られ常にその衣服を身につけていたという。

このことを虎関師鍊は、『元亨釋書』において、この乞食は達磨であるとしたのである。これは、隻履の達磨の伝説を承けて作り上げられた物語である。

この説は禅僧が言い出したことではなく、比叡山の天台宗光定が『伝述一心戒文』に記述されたことに始まる。また光定は聖徳太子は、中国の天台宗の宗祖天台大師智顗の師匠である南岳慧思の生まれ変わりという説を設けて、天台と禅の結びつきを強くし、『自性清淨一心戒』を唱えたのである。つまり、南岳慧思と達磨のつながりを唱えたのであると言われている。

禅の正式な傳來は、白雉四年（六五三）法相宗の道昭が入唐し、玄奘のもとで唯識学を学び法相宗を伝えるが、玄奘のすすめで、二祖慧可の法嗣である慧滿について禅を学び、帰朝して元興寺の東南隅に禅院を建て坐禅をしたことに始まる。

第二は、道璿が天平八年（七三六）菩提仙那とともに来朝し、北宗禅を伝えた。

第三は日本天台宗の宗祖である最澄である。最澄は牛頭禅を伝えたのである。

第四は、南宗禅を伝えた義空がいる。これは純粹な禅のみを伝えた最初といわれている。これは檀林皇后が釋慧学を唐に使わし、禅僧を招こうとして来たのが義空である。

第五は平安時代に入宋した覺阿がある。覺阿は杭州の靈隱寺の佛海慧遠の法嗣となり、日本に伝えたが、開法した寺もなく、時期も熟していなかったのであるため、日本に伝えられた四十六伝には数えられていない。

第六は、大日能忍である。この人は、師承つまり師からの証明がないことを非難され、弟子を中国に行かせ、拙庵徳光の証明を得させて、日本達磨宗として禅を挙揚したのである。孤雲ここには永平寺の二世である懷辨がいる。

そして、鎌倉時代へと入っていくのである。

鎌倉時代以来、日本に伝わった禅は、二十四流四十六伝といわれ、そのほとんどが臨済禅である。そして、その禅が、特に鎌倉と言う地においておおいに栄えてのは周知のことである。特に、建長寺の蘭溪道隆禅師、円覚寺の無学祖元禅師に代表される来朝僧によって純粹の禅が中国より日本に伝えられたのである。

その後の時代に、中国に渡り、虚堂智愚のもとで修行し、日本に松源派の禅を伝えた大応国師、南浦紹明、その法を嗣いだ大燈国師、宗峰妙超、さらに関山国師、関山慧玄の禅を、応灯關一流の禅と言うのである。

この流れが、妙心寺を中心に栄えていくのである。妙心寺の六代目、雪江宗深の弟子、景川宗隆の竜泉派、悟溪宗頓の東海派、特芳禅傑の靈雲派、東陽英朝の聖澤派の四神足が出てその系統が大きく発展するのであるが、その中、近世臨済禅を大きく発展させた、盤珪、古月、白隠がいるのである。盤珪、白隠は東陽英朝の聖澤派の法を承けたの

であり、古月は、特芳禅傑の靈雲派の法を承けたのである。

この近世臨濟禅を大きく発展、展開させた、盤珪・古月・白隠の三師によって、臨濟禅は今日に至る伝法が作り上げられたといえる。

(参考文献、荻須純道著・禅宗史入門)

(二) 近世臨濟禅の三師について

近世、特に江戸中期から末期の時代に出世し、独自の禅風を挙揚した禅匠である、盤珪永琢、古月禅材・白隠慧鶴の三師には、それぞれ深い関係がある。年代的には、盤珪・古月・白隠の順になる。

まず盤珪であるが、盤珪は幼少の時『大学』の「明德」の意味に疑問を持ち、諸師に参じたが納得できず、自分で体得する以外に、「明德」を理解することはできないと考え、苦行・修行をしたのである。

この苦行のため死ぬ寸前まで修行をし、忽然として悟りを得たのである。盤珪の師である雲甫に「汝徹せり」と言われ認められたのである。その後、長崎に来朝していた明僧、道者超元に参じ、「琢禅人大事了畢せり」と言われたのである。この時、盤珪三十一才であった。

長崎をはなれ、師の元に帰ったが、既に雲甫は遷化しており、雲甫の命をうけた兄弟子の牧翁祖牛の法嗣となったのである。そのため、盤珪は雲甫の系統に列している。しかし、実際には、盤珪はむしろ無師独悟と言える禅僧である。当時から臨濟禅は古則公案の禅であるが盤珪は、不生の二文字ですべてがかたづく主張し、不生禅と呼ばれるのである。そして、従来の臨濟禅の修行の中心をなす古則公案を反

故紙の詮議として用いず、不生ですべてがととのうとしたのである。臨濟禅でありながら古則を否定した点は、特筆するに値する。しかし、盤珪の語録を見ると、むしろ古則公案は用いないが現成公案を用いたのではないかと思える所がある。

この盤珪は、後に四国伊予に如法寺を開き住した。この如法寺に古月が行き、盤珪に参じたのである。そして、盤珪に「汝大事を了畢せり」と言わせたのである。つまり、盤珪は古月を認めたのである。

この古月は、十才の時、宮崎県の佐土原にある大光寺の一道禅棟のもとで出家し、ある日『楞嚴經』の一文を読み、仏戒を堅持し、違犯しないことを誓い、仏戒の堅持を立てて宗旨を興したので古月の禅を持戒禅と言うのである。ここでは、深く述べないが、古月の禅の特色は持戒禅の一語で言うことのできない内容があると考えている。つまり、持戒禅とは古月の禅の一面をとらえた言い方であると考えている。

次に、古月と白隠との関係についてである。古月には「荷葉団々の頌」にすぐれた見処があり、それを聞いた白隠は、古月の所へ行き、その見処を手に入れようとしたのである。白隠二十九才の時である。九州の古月のもとへ向う途中、古月の用処を手に入れたので行くのを止めたのである。もし、古月と白隠が出会っていたら、どの様に白隠禅が展開したのであろうか。

ところが、この白隠の存在が、結果として古月下の衰退をまねくことになるのである。それは、古月のもとで修行し、印可を得たものが白隠に参じ、白隠の法を嗣ぎ、白隠禅を挙揚したためである。

それと、もう一つ古月禅が時代をへるにしたがって変化していった

のではないかと思う点がある。つまり、禪の命脈である「悟り」ということがなくなつていったのではないかと思うのである。それは、明治の禪僧に禾山玄鼓がいる。この禾山は越溪守謙の法を嗣いだ人物である。この禾山の師は、晦巖道廓である。この晦巖は、誠拙下の淡海昌敬の法嗣である。この晦巖は当時碩学で、晦巖の知らざる字は、字にあらずと言われるほどの人物である。この晦巖の弟子である禾山伝に、「親炙すること十年、一日、巖從容として師に諗^{シヤ}げて曰く、老僧の学海、業已に你が為に傾倒せられ、復た涓滴を遺すこと無し。你、当に去つて禪に参ずべし」と言つて、久留米の梅林寺の羅山元磨に参じさせたのである。晦巖が言う禪は、晦巖の所には無かつたと言うのか。どのような意味で、この様に言つたのであろうか。また古月系の禪より白隠禪の方がよいというのか。どのような意味で晦巖は白隠下の羅山に参じさせたのか。古月禪が衰退していく理由は、この様な所にあるかもしれない。

晦巖の禪はむしろ「文字禪」であると言つても過言ではない。その様な意味からすると、やはり禪の本質が次第に欠如し、その結果として禪としての伝統が衰退していったと言えるのではないかと推察することができる。

古月禪の法系は、明治になり断法したとされている。そして、明治以降は、白隠禪が日本の禪界を席捲するのである。それを機に、鎌倉・九州を中心に栄えた古月禪の法系は消滅していったのである。

ただ、私は、古月禪が完全に消滅したのではなく、白隠禪の中に生きていて考えている。つまり、法系的・表面的に古月禪は消えたの

であるが、その禪の内容は、白隠禪の中に血肉となつて存在していると考え。その一つは、白隠下でありながら、古月の主張した持戒を厳守した禪僧は非常に多く存在している。しかし、修行内容である公案の見処などを分類し、抜き出すことは可能かと言へば、その答は不可能であると言える。しかし、白隠禪の公案の中に古月禪は生きていえると考えるのである。

では、なぜ古月禪が白隠禪の中に生きていて考えるのかを根底に置き、白隠以降の白隠禪と古月禪について述べることにする。

(三) 古月禪と白隠禪

今回、述べるにあたつて用いる資料は、『近世禪林僧宝伝』を中心に用いることにする。

まず、『近世禪林僧宝伝』について、釈宗演老師の法嗣である棲梧宝嶽老師の法嗣となつた陸川^{リクガワ}堆雲居士は、現在の僧宝伝の一卷目は相国寺の荻野獨園老師の作であるが、「羊頭狗肉」だと言つて批判している。特に白隠伝については、口調も強いものがある。白隠下の諸師については、卓洲の法嗣である妙喜宗績の著わした『荊棘叢談』を読むべきであるとする。次に二、三巻目の続編の著者は小畠文鼎であるが、この点については、絶讃している。しかし、現在の所、これらの書物が伝記資料としては第一であると考えて用いることにする。只だこの様な意見もあることを知った上で用いることを承知して頂きたい。

そして、僧伝を読みながら古月禪と白隠及びその門下のつながりに

ついで述べることにする。

まず、古月禪と白隠の關係について見ることにする。

初めに、白隠の出世が、結果として古月禪の衰退へとつながっていくと述べたが、古月のもとで修行したもの、又、印可されたものが、白隠の当時の名声によって、白隠下に参じたのである。この点は、白隠下の諸師の伝を見れば理解できるであろう。

古月下の人々が白隠のもとに参じたことで、古月のもとで修行した禅僧が、白隠自体に何らかの影響を与えたであろうことは、十分に推察することができると思う。そこでまず、古月下の禅匠である雲山祖泰という人物と白隠との關係に於て見ることにする。それは、白隠へ与えた影響が一番強いと考えるからである。

そこで、雲山祖泰の伝について見ることにする。

先にも述べた様に、近世禅林僧宝伝を読みながら、話すことにする。

駿河州金剛寺の雲山禅師伝

師、諱は祖泰、字は雲山。駿州の人なり。古月に参侍して大事を成辦す。其の古月を辞するに臨んで、翠巖偈を作つて送餞して曰く「一枝杖頭、神通を逞にす。楚雨湘雲、祖風を荷う。嘗だ鰲山の夢を驚回するのみにあらず。門は光耀を添う、古禅叢。郷に還つて間門の金剛寺に住す。師、鵠林と同庚なり。髻鬢相親しむ。既に古月の印を佩びて、又林の室に入り請益して頗る得る処有り。凡そ林の往く所、師、必ず追隨す。一日、林の後に在つて偃臥す。偶々比奈邑の杉山氏の寡婦、名は政、来たつて室に入る。師、將に避けん」とす。

林、之を止めて彼が機略を視せしむ。其の林と肝胆相照らすこと斯の如し。化を揚ぐること三十年。晩年、茅を近里に結んで靖退す。林、往きて師に訪う。偈に九律有り。林、其の礎を廣ぐ。引に曰く「享保乙卯、仲春の初め、佛日老人、衣盂を抱いて前村隠僻の処に遁居す。予、老懶たり。賀せんと欲して果たさず。杪春の杪、偶々令辰を得て、杖を曳いて之を訪う。漸く流鶯稀に伝え、桜花頻りに飛ぶ、緑樹陰処を望んで尖室の茅茨を見る。而も室に到るの往路を得ず。往きて復た還り、還つて復た往き、躊躇少しく時を経て、心窃かに慚ること有り。嗟、心交四十歳。行程里許り、而も其の居る所を知らず。是れ隱室の以て隱為る所か。將た陋巷の以て以て陋為る所か。胸中の一奇、言うべからず。少焉して一僧有り。相引いて室に入る。其の清貧枯淡、寔に俗骨を抜く。賓主相見て覺えず一笑す。」夜に入つて師偈有り。即ち韻を和して曰く「百鍊清閑折脚鐺、何ぞ観ん鳳髓龍肝を煮ることを。拈拋す。笏室千鈞の担、占斷す、艸廬初九の蟠、清話、魂を驚かす、咬猪口。新詩、骨を換う透瓶舟、人間怪しむ莫かれ、斯の人の在ることを、樹に大椿有り、草に蘭有り。」（節一なり）其の余、唱酬す。亦た尠くなからず。延享四年五月二日示寂す。世壽六十三。金剛に塔す。遺偈に曰く「六十三年、鳥は白く鷺は玄し、□□□□、□□□□。」筆致は窘澁、後半甚だ読み難し。鵠林附評して曰く「雲山老人、真正の真面目」と。林又師の像に題して曰く「道標高古、氣宇清間、西、海に航して古月の黒光に撞着して仏心印を擊碎し、東、家に還つて玄沙道底を透脱して法窟の牙を拗却す。是れ従り諸方の枯木裏の禅徒を脳害し、或る時

は、近隣の曲象上の諸老を描貌す。心交四十載、別涙千萬行。其の徒一兩肩し来たつて画像に題せんことを請う。真は是れ普光堂頭、定中の遊戲、讀は即ち沙羅樹下、睡裏の狂言。讀語未だ成らざるに先ず春睡す。夢中相對の笑顔親し、覚め来たつて老淚、衣袖に満つ。七月廿二当午時。」

雲山祖泰は、白隠と同様、駿河の国の人であり、古月禅材について修行をして、その法を嗣いだのである。雲山は、白隠伝から考察すると、三十五才で金剛寺に住したのである。

雲山は、白隠と同年であり、子供の頃より共に遊んだ竹馬の友である。白隠は、諸師に歴参したが、雲山は、古月にのみ参じたようである。しかし、古月の元より故郷に帰り、金剛寺に住していたが、白隠が化を敷くようになると、白隠の室内にも参じたのである。そして、白隠と常に行動を共にし、白隠をささえた人物である。

雲山は、又、作詩にすぐれていたようであり、白隠の漢文学は、この雲山の力に依るのではないかと考えられる。古月下は、偈頌などの作詩に力があつたようであり、晦巖道廓は、誠拙の詩文によって出家し誠拙に参じたと自伝で述べているほどである。

この雲山は、世寿六十三才で遷化し、白隠より二十年早く遷化したのである。そして、白隠自身、雲山の遷化を非常に悲しんでいることも理解できる。

雲山伝によつて、白隠と雲山の関係は、相当深いものであることが理解できる。

又、白隠の室内にも参じたことにより、白隠との問答によつて、雲山より古月下の公案のさばき方も、白隠は知ることができたであろうと考える。つまり、雲山との間に於て、古月下の法財を白隠の中に取入れることができたと考える。そして、白隠と雲山との中で公案についてたがいに研鑽を積んだことが、後の伝記によつて、もつとはつきりするであらう。

この白隠と雲山との関係の中に入つて来たのが、次の二人である。つまり、快巖と大休の二師である。

この二人が白隠に参じた理由も含めて見ることにする。

快巖和尚伝

師、初め古月禅師に参じ、大事を發明す。時に井山の太休亦た同参なり。二人相与に謂つて云わく「我等二人、大事成弁す。猶此に在るも亦た益無し。縦令い天下を一周するも、孰れ能く我二人に勝る者あらんや。若かず。迹を熊野に晦まし、聖胎長養し以て一生を畢らんのみ。乃ち計を決す。偕に与に古月を辞し去る。將に浪華に抵たらんとし、淀の養源寺に投宿す。明旦、旦過の壁上に清淨の行者不入涅槃の頌に題するを見て云う。「間蟻争い曳く蜻蜓の翼、新燕並びに休う楊柳の枝。蠶婦籃を携えて菜色多く、村童筍を偷んで疎籬を過ぐ」と。二人読み了わつて矇然として喩うる莫し。以為らく大いに波斯の謔語を説くに似る。因つて怪しんで之を問う。「是れ何人の作か」と。僧云わく「東來の雲衲相伝えて云う。是れ駿州の白隠和尚の頌なり」と。此に於て二人相与に議して曰く「白隠果たして

何人ぞ。我等既に大事成弁す。而して者の老漢の説話を解すること能わず。顧うに者の老漢必ず道理有り。若し此の老に見えんば他日必ず悔い有らん。如らず、且つ白隠に見え去つて後熊野に入らんには、未だ晩からざるなり」と。是に於て脚を転じて東行し、直に鵠林に造たつて相見し入室を請う。林、之を許す。師、休を先に入らしむ。休進んで纔かに挨拶し、即ち出で来る。師曰く「汝、未だ室に入らざるや」と。休曰く「止みねい、止みねい。者の老漢、我輩及する所に非ず。汝只だ去れ。師、入来し、見解を呈す。林、抑揚する所有り。因つて与に往復言論す。師の理詞遂に窮む。林に折倒し了らる。懔懔趨り出づ。休謂つて曰く「我及ばざるなり」と。是に於て二人偕与に拄杖を拗折し、掛塔を乞う。且つ相誓つて曰く「我等二人、苟も大事了畢に非ざれば此を去らず」と。師曾て人に謂つて曰く「航、我と利鈍懸殊なり。航、纔かに鋒を交え、已に負墮を知る。我如きは則ち弓折れ矢尽くるに至つて始めて他に擒獲せらる」と。其の夜、雲山和尚到る。雲山亦た古月下の尊宿なり。鵠林、之を延いて茶話す。林曰く「此間、新到の二人有り。日州自り来たる。」因つて二人を召して曰く「客は是れ雲山和尚なり。汝等始めて此間に到る。未だ門限の高低を知らず。我、和尚と道話す。汝等須らく侍坐し傍聴すべし、必ず一益有らん」と。因つて雲山と共に綱要を提綴し古今を商確し曉に徹して止む。二人、未だ聞かざる所を聞く。感極まりて泣く。既に退き相謂つて云わく「意わざりき。佛法是の如き事有らんとは。」師の南泉斬猫の図の賛に曰く「猫兒を提起し両堂に拶す。炎天六月勢い霜を飛ばす。一刀斬却す三三九。」

日、西峯に到り影漸く長し。嘗て以て東嶺に視す。嶺極めて之を称める。師時に年八十と云う。

快巖は、最初、古月に参じ、古月に印可されている。次に述べる大休と同参である。この二人が、古月の元での修行が終つたので、聖胎長養のために、熊野の山中に隠れて一生を終えようとしたのである。そして、行脚して、大阪の淀にある養源寺の旦過寮の壁上に、「不入涅槃」に対する頌が書かれていた。その一文は、

間蟻争い曳く蜻蜓の翼、新燕並びに休う楊柳の枝、蠶婦籃を携えて菜色多く、村童筍を偷んで疎籬を過ぐ

である。この頌が二人には理解できなかったのである。二人にとつては、正に「波斯の謔語」である。そこで、この作者を問うと、白隠であることが知らされる。二人は相談し、白隠に参じることにする。二人は、古月のもとで印可もされ、大事了畢している自信もある。勢いこんで白隠に参じたことであろうと思う。いざ白隠に参じて見ると、齒がたつどころではない。まったく相手にされない程の力量の違いを見せつけられたのである。二人は相談し、白隠のもとで大事了畢するまで参じることを決めたのである。ある夜、雲山祖泰と白隠との問答を聞かされるが、その中味は、未だに聞いたこともないものであったと言う。

以上が、快巖が白隠に参ずる経緯である。

次に、大休伝である。

寶福寺の大休和尚

師は、山城の国愛宕郡北巖倉村の産なり。五歳に比び、諸宗師、之を得んと欲す。屢々其の父母に乞う。皆聞かず。師、自ら言う「我れ来る歳禪門に投じて出家せん」と。六歳、郡の木野村、正福庵の竺伝応公の求めを以て其の驅鳥と為る。応公、名を慧昉と安んず。里人、師の前言の符を欽しみ、嘆じて曰く「黄口児、言うを食らわず。戴白老、応に愧じる有るべし。十歳、誘導を待たずして自ら好んで誦經・礼佛す。十六歳、応公、人に父母未生前等を言うを聞き、心常に疑いを懷く。閑暇を得る毎に只管ら打坐す。人を介して応公に乞うに象海湛公を東福に於て拝せんと欲するを以てす。応公喜んで之を許す。乃ち携えて往き謁せしむ。爾來、師、常に自ら往きて工夫の要を問う。其の途中、只管ら鼻頭を守る。未だ曾て長安の繁華を見ず。誤って車馬に撞著し、馭奴の叱る所と為すこと數次なり。十八歳、東福和尚、僧堂の久しく閑関を嘆じて、湛象海をして勉めて復古せしめ、茲の冬、重ねて開單し広衆を容るるに會う。乃ち往きて掛塔す。即ち海師の侍薬に充つ。一日、師、茶菓の滓を捨てんと欲し、通天橋上に往く。茫然として前後を記せざること數刻。時に紅楓錦を曬す。亦未だ其の眼を歷ず。其の工夫の純一なること率ね此の如し。人称して夢中侍者と曰う。二十三歳、雄首座と同じく日州に往き、古月和尚に見え所見を呈す。月曰く「子の見処、果然として門外に在り。若し生死岸頭に到らば、毫分の用処無し。請う精彩を着けよ。自ら打成一片の時節有らん」と。乃ち趙州十二時歌を挙し、之に参ぜしむ。明年の夏、雲堂の侍者寮に在り。將に茶

瓶を携えて庫院に赴かんとす。忽ち心頭鉄に似る。足、虚空を歩むが如きを覚ゆ。時に復た佇立す。清風颯として懷に入る。其の行くに方り、露柱に撞着し、忽然として省有り。便ち入室して月師に告げて曰く「胸中礙壅の物、今日方に通脱し了る。」月只だ微笑むのみ。二十七歳、是の秋、將に徹禪客と南紀の熊野に之き閑処を得て快談し日を消さんとす。時に駿の白隱和尚、洗淨の行者、不入涅槃、破戒の比丘不墮地獄を頌して「間蟻争い引く蜻蜓の翼、新燕並びに休う楊柳の枝。山婦籃を携え菜色多く、村童筍を偷んで疎籬を折ると曰う」を。少しく之を怪しむ。徹と共に相言うに及び、他を勸し去らんと欲し、遂に駿に之き隱と相見す。師、其の波瀾浩大を知り、心先ずは驚動し、掛塔を乞う。許さず、初め且つ其の隣りに庵居し、後に稍々之に近づく。數々入室を乞う。一朝、他の逗遛する所と為す。扣頭懺悔し、乃ち行卷は従前の参得する所の一句一語記するものを取つて之を火く。明年、隱、師の鐵漢為るを知り、侍者職に補す。一日、隱、雲山老を訪れ話次に、山、隱に謂つて云わく「碧巖百則中の頌、孰れを最も殊絶とす。」隱云わく「南泉一株花の頌を以て殊絶と為す。」山、之を然りとす。師、陪侍して之を聞く。苦思し深く省して懵焉として知ること能わず。自ら以為らく我れ参禪の日久し。既に帰途に臨み、所解を通さんと欲すも之難かるべし。乃ち隱の後に尾随し進んで其の杖を捉うること二三回。隱、時機既に熟するを知るも故意に之を払って行く。師、熱憤し至ること切なり。人家の半牀に、路傍に踞し瞑思すること頃刻。忽然として省有り。眼を開いて隱を見れば、既に所在を失す。即ち走つて寺に歸り所見を呈す。

隠、之を證す。師、是に於て乃ち知りぬ。凡百の言句、皆な親疎の分有るを。三十歳、歸りて応公を省みる。是に於て井山、応公に依つて屢々師をして報恩に住せしめんと欲することを言う。師、亦由つて以て応公の衰老を扶けんと欲す。遂に之に従う。一夕の夜坐、更深に至り、村犬の吠ゆるを聞き、豁然と大悟す。従前の智見頓に脱す。歡喜の余りあり。其の翌往きて井山に見ゆ。未だ一語を發するを及ばざるに、山便ち曰く「来たれ汝、我れ初めて子を以て北溟物と爲し、其の自ら化すを待つこと茲に年有り。時なるかな、吾れ爾に隠さず。正法眼藏、今汝に付与し了る。師、唯だ黙々と三拝を消うるのみ。師、孝を以て聞ゆ。道俗、其の行則つとる可きを見て、因つて自ら前非を悔ゆる者頗る多し。師の応公に事うるや。夙に興き夜に寐ぬ。春炊調和す。皆な自ら之を弁じて少しの倦色有ること無し。四十一歳、是の春、井山の逸堂師、楞嚴会を開く。接衆三百余員。師、侍衣と爲る。講畢る。堂、後事を法弟の顯鰲山に託し、衆を送つて門外に分散す。乃ち踵を回えさずして席を退き、直ちに連島に往き德聚庵に居す。是に於て顯公、師をして主位に坐さしめ、法眷及び末派を席下に列す。乃ち天沢和尚の命に達す。又、師、東上し東福の第一座に転位せしむ。字なして大休と曰う。既に例を攀じ声を一條准三后前関白殿下に通じ、台顔を謁し、厚遇を受く。夏、井山に歸る。住山式を行う。師、法語有り。其の山門に云わく「大道門無く、千差路有り。只是れ見易く入り難し。諸人如何ぞ入り得ん。」其の佛殿に云わく「巍巍堂々、万德尊、古往今来、回避する處無し。即今甚んの為に頂相を見ざる。」土地堂。一指を挙げ

て云わく「会か不会か、会取すれば宜しく応に禪壇を鎮めるべし。会せざれば、尚、須らく禪壇を護すべし。祖師堂に云わく「一二三四五、結果自然に成る。咦。庵内の人、甚んに因つてか庵外の事を知らず。」登座に云わく「一超超過す、如来地、座下の獅子兒を叱る、当面蹉過すること莫かれ。」次に祝香す（録せず）嗣法に云わく「者箇の爛柴片、秘かに袖裡に在ること多年、今日探尋せられ、些子の香氣を漏泄するを免れず。恭しく前住当山天沢西庵老師の為に奉り、用いて法乳の恩に酬ゆ。粉骨碎身、何ぞ奉るに足る。無辺の德澤、刹塵塵。首楞嚴定、世希有、之を瞻、之を仰ぐ、億萬の春。」索話す。大衆を顧視して拂一拂して云わく「恁麼に会取す十万八千、総に恁麼ならず。株を守つて兎を待つ。大衆、如何が身を転じ去る。試みに出で来たれ商略す看ん。有りや。」問答畢り拄杖を卓すること一下して云わく「記得す。三聖の示衆に云わく、我れ人に逢えば則ち出で、出づれば則ち人の為にせず。興化聞いて云わく、我れ人に逢わば則ち出でず、出づれば則ち人の為にす。五祖演云わく、二りの古德、一人は文章浩渺、一人は武芸全施なり。諸の衲子試みに弁別看よ。若し弁じ得ざれば後伴を看取せよ。參。虎頭燕頤、烏觜魚鰓、尽く者裡に向い款を納る。且く道え、者裡是れ什麼の在る所ぞ。許さず、胡喝乱棒すること。」便ち下座す。此れ自り雲衲四集す。諸方に応請すること勝数す可からず。六十歳、是の歳の三月、師、疾有り。遂に伝戒相承、信衣及び其の的祖系を雪大雲に付す。蓋し死の稍々近きを知るを以てなり。五月、師の疾弥々病む。国医皆な匙を投げて嘆ず。師、独り安然として縁の尽くるを待つ。六月三

日、將に午にならんとす。旧參の諸士、辨天眼・慈漸潮・機凌雲・壽無敵・猛睦・說大雲・昌古巖・安絕崖・門行応・薰梅溪・旺東明及び山中の諸尊老、並びに床側に在り。時に傍僧有り。末後の句を乞う。師、威を振るつて悦懌の色を作す。微笑し眼を開き之を示し、乃ち湛然として坐化す。世壽六十、法臘五十五。法を嗣ぐ者十有一人。

大休も古月に参じた人である。最初、東福寺の僧堂に掛塔して、少分を得たのであるが、その後、古月に参じた。古月は、「趙州十二時歌」を与えて参じさせたのである。そして、この公案に依つて大悟したのである。古月に参じたのは約四年間である。その後、快巖伝で述べた様に二人で聖胎長養しようとしたのであるが、白隠の著わした「不入涅槃」の頌を見て白隠に参じたのである。白隠に初めて相見した所、白隠の力量の凄さに退き、そこで、古月に参じた公案の行巻を焼きすてて、あらためて白隠に参じ直したのである。そして侍者として白隠の近くに仕えたのである。ある日、白隠と雲山との問答を聞かされるのである。その内容は、『碧巖録』百則中の頌についてであつた。そのやり取りを聴いて、今まで自分が悟つたことなど、何の役にも立たぬことを思い知らされるのである。その後、白隠の印可を得るのである。快巖・大休に対する白隠の接化は、妙を得たものであることは、十分に理解できる。白隠の構築した接化法は、すぐれていたと言えるのではないだろうか。それは、今日に致るまで、白隠やその法を嗣いだ祖師方の工夫によつて伝承されているからである。そうでなければ、

二十四流の禪が消滅することはなかつたであろうと考える。

しかし、すぐれた接化法であつても、完全ではない。白隠ほどの人でも、接化を失則したこともある。それは、長堂伝によつて示すことにする。

長堂和尚伝

師、古月に参じ、無字を發明す。爾の時、鵠林の法道鼎盛なり。衲子、先を争つて之に赴く。師、亦た去つて、之れと一場の法戦を試みんと欲す。因つて月を辞す。月曰く、「汝、且く往くこと勿れ。」師、可ならず。月曰く、「汝必ず恁麼に當に紹介を作すべし。」乃ち書を以つて師に与う。師、之を帶びて去り、鵠林に謁す。時に林が入浴に値う。師、直進して之に見え、見解を呈す。林曰く、「汝、与麼ならば虚しく此間に到らざると謂うべし。且く休し去れ。」師、那時自ら謂わく、「他、我を肯わず。」林浴室を出ず。師、威儀を著け入つて相見す。併せて月の介書を呈す。林、緘を開いて之を読み、「この者小生見処無きに非ず。只是れ小量漢なり。請う、師方便して他を接せよ」と曰うに至つて、便ち罵詈して曰く、「汝、小根劣機なり。若し大事了畢を作さば什麼の用を作すに堪えんや」と。師、其の所見を奪われ、直下に発狂す。爾後竟に復せず。鵠林居して恒に嘆じて曰く、「我、平生人に接すること極めて多し。中間、只筑後の長堂及び某との二人を誤り」と。後、師、筑後に歸つて住院す。小僧堂を構え、独り自ら叢規を行す。臘八毎に難僧併びに猫児を携えて僧堂に入つて坐す。猫児走り出づれば之を捉えて警策して曰く、

「汝何ぞ我が山中の規矩に従わざる」と。猫児を打殺すること其の数を知らず。然るに操履綿密にして寿を以つて所居を終わると云う。

この長堂も、初め古月に参じたのである。当時、白隠の名声は、九州にまで届いていたのであろう。古月のもとにいた長堂も、その名声によつて白隠に参じようとしたが、それを古月は止めたのである。しかし、長堂は、それを肯わず、古月の紹介状を持つて白隠に参じたのである。白隠は古月の手紙を読み、長堂の小量であることに一喝した所、それによつて発狂したのである。この長堂の外に、もう一人、接化を誤った人物がいたようである。つまり、接化は非常に難しいことが理解できる。だが、その中で多くの法嗣を打出した白隠の接化法が勝れていると言うことはできるのであろう。

この白隠の法を嗣いで、白隠禅を磐石なものにしたのが、東嶺円慈である。そこで、東嶺伝について見ることにする。

龍沢寺の東嶺和尚伝

師、近江の人なり。初め古月に参じ、箇の省処有り。後に鵠林に見え侍者と作る。数年間尽く室内の事を参得す。辛鍊苦修を積み、遂に重疾に致る。百薬効無し。自ら謂えらく、「我れ既に宗趣を究むと雖も、如し一旦溘死せば、何ぞ法門の益あらんや」と。因つて『宗門無尽灯論』一遍を著わし、以て鵠林に呈して曰く、「此の中、若し採る可き有らば、請う、以て後に貽さん。若し其れ杜撰ならば速やかに火中に投ぜよ」と。林一見して便ち云わく「是れ以て後世の点

眼薬と作す。」師、遂に鵠林を辞して京に之く。関を白河の辺に掩う。唯だ病を是れ養う。死も亦得。生も亦得。任運自在、以て時日を消す。一日無心中自り鵠林平生の受用底を徹見す。是れ従り病亦随つて軽安す。歡喜に堪えず。書を馳せて鵠林に報ず。林、之を披閱し大いに喜ぶ。即ち裁答して曰く、「必ず速やかに帰来すべし」と。師、因つて速やかに束装し、帰つて鵠林に従う。林、法衣を出だし、之を付して曰く「此の金襴の衣、我曾て之を服し、四たび『碧巖録』を講ぜり。今、以て汝に伝う。宜しく後世に断絶すること莫からしむべし。」師、頂戴し之を受く。此従り師資商論し宗旨を建立す。五位十重禁等、微細の旨要、師實に至れり尽くせり。故を以て当時、鵠林衆中微細の東嶺、大器の遂翁の称有り。鵠林、晩年、氣力漸く衰う。師、力めて学者を鞭勵す。凡そ晩年に従事する者、其の得力多く鹵莽なり。然るに峨山、頑極、諸子、往々師の穿鑿を与かる。是れ以て瞥脱す。鵠林、京師等持の請に遇う。時に年八十四。老病殊に甚だし。師に代わらしむ。師、等持の請に赴き、『人天眼目』を提唱す。合衆四百余なり。大いに鵠林の宗風を振るう。会未だ畢らず。而して林の訃至る。解制を待つて、速やかに松蔭に帰る。遂翁と俱に葬事を行う。師、嘗て江戸の至道庵に夏を過す。『虚堂録』を講ず。乾峰法身三種病に到る。便ち曰く「此の一段の因縁、實に格外と為す。今日且く置かん」と。峨山和尚、解制の後、永田自り来たと聞く。那時当に講すべきのみ。山至る。師、乃ち之を講ず。大いに他日を異にして云う。師、江戸の東北庵に於て『碧巖録』を講ず。第三則に到り、挙揚して曰く「日面佛月面佛」と。時に柴田

元養の母有り。年六十余。坐下に在つて之を聴く。胸宇之が為に豁爾たり。講の後師に見え、所解を呈す。師、大いに之を喜ぶ。母氏臨終に、其の女孫に、誡めて曰く、「汝、幼艾と雖も、宜しく勉めて佛乘に帰依すべし。何となれば、我れ嘗て東嶺和尚の「日面佛月面佛」を挙するを聴いて、一旦開悟し、直に今に到る。胸中復た一点の塵滓無し。即今死去するに安然として帰るが如し。其れ復何をか患うや。汝、若し佛乘に帰依せざれば、我が女孫に非ず。記取せよ。言ひ訖り泊然として化す。

この東嶺は、白隠下の神足であり、白隠下では「大器の遂翁・微細の東嶺」と言われ、白隠下の公案体系の創始に尽力した人物であると考える。陸川堆雲居士は、白隠・東嶺によって公案体系が作られたと断言すべきではない旨を述べるが、私は、むしろ、白隠・東嶺の父子二代によって公案体系の基礎が作られ、歴代の祖師方によって現在の形式になったものとする。この点については、後日を期して述べることにする。

東嶺伝については、『東嶺和尚伝』の小冊子がある。そこで述べられていることも含めて論じることにする。

東嶺円慈は、臨濟宗の中でもあまり知る人はいない。白隠下の僧堂では、通代伝法を朝課の時に読む。この中に東嶺の名は出てこない。しかし、白隠下において東嶺は重要な人物である。この点については、次に述べる峨山伝で述べることにする。

東嶺は、初め古月に参じた。それは、東嶺の生家に古月が来訪した

ことによる。ところが古月のもとでの修行は、東嶺にとって満足するものではなかった。それは、古月が祈禱ばかりやっており、ある日、東嶺は「雲門餠餅」（碧巖録七七則）に参じている時、古月に祈禱をすることを促すが、東嶺がだまっていると、古月は、「もちがのどにつかえたか」と笑われたと言う。この様な中において、東嶺は、禪の本質である悟を求め、白隠のもとに行くことになるのである。

白隠のもと「此れ従り師資商論し宗旨を建立す。五位十重禁等、微細の旨要、師、実に至れり尽せり」とある様に、公案の微細な調べが東嶺の力に依ることがこれで理解できるであろう。

白隠・東嶺によって作られた公案体系を嗣いで、今日まで致るもとを築いたのが、次に述べる峨山である。

麟祥院の峨山和尚伝

師、奥州の人なり。三春の光頭の月仙和尚を拜し剃髪す。年十六、始めて出でて游方し、直に豊前に赴き、萬壽の虚霊和尚を謁し、入室参禅す。九旬の間、少しく省処を得。後に日の翠巖、丹の大道等に見え、参究し、歳を経る。凡そ三十余人の善知識を歴叩す。他皆な師を奈何とすること能わず。乃ち月仙の永田に帰省す。仙、亦た之を許可して云わく「汝、復た他に往くこと莫かれ。只此間に住せよ」と。爾の時、師自ら謂えらく。大事已に了ぜり。且つ其の間、屢々鵠林の門を過ぐるも参見するを欲せず。一日、自ら計るに我れ天下の諸老和尚を見るに曾て一箇の我を指摘する者無し。未だ見ざる所の者は鵠林一人のみ。他の用処の若何を知らず。因つて鵠林を

見んと欲し以て仙に告ぐ。仙曰く「往くこと勿くして可なり。何ぞ必ず鵠林に見ゆ。」師、之に従う。又住すること一年。會々、鵠林は江戸の桃林の請に応じ『碧巖録』を講ずるを聞き、乃ち思惟すらく、我れ這の老を見ざれば、實に大丈夫に非ず。將に志を決して往かんとす。仙復た之を止む。師、可からず。直に桃林に往き見解を呈す。林、詬罵して曰く「汝、何の処の悪知識ぞ。敢えて来て許多の悪臭氣を放つや。」輒ち之を打出す。師、少しも屈せず。遂に打出せらるること三たび。師自ら念う。我れ實に悟處有り。而して彼故意に我を摧するなりと。散筵に及ぶ比おい、一夕、衣單下に在つて思惟す。彼れ實に天下の大知識と為す。豈に浪りに人を打することを要すや。彼必ず長處有りと。是に於て入室し悔謝して曰く「昨は慈棹錯つて和尚に触忤す。伏して乞う、宥恕し願わくは開示を垂れたまえ。」林曰く「汝、後生家の一肚皮禪を擔つて一生を過ぎ了らんとす。縦使い口波波地たるも生死岸頭に到つて総て力を著けず。若し平生を痛快にし去らんと欲せば須らく我が隻手の声を聞くべし。」と。師、拜謝し出づ。是れ従り始めて鵠林に服事す。時に師年三十余。歸つて月仙に告げ、將に松蔭往き掛塔す。仙亦復之を止む。師、可ならずして去る。鵠林に参すること凡そ四年。是の時、林年已に八十余。応接或は怠る。師、因つて屢々東嶺を叩く。林遷化の後、復た永田に歸りて住庵す。後に天沢に住すること十年。『虚堂録』會を設け闡衆五百余。東嶺・遂翁往きて化を助く。時に月仙示寂す。永田、之が為に寂寥たり。師、因つて永田に退休す。従学の徒漸く聚まる。愚溪・行応・卓洲輩、相踵いで至る。後再び

天沢に於て碧巖會に設く。五百余衆。東嶺・遂翁亦た随喜す。又、濃州の清泰の請に赴き、『碧巖録』を提唱す。凡そ五百衆。松蔭の請に応じ『槐安國語』を提唱す。衆に示して曰く「我れ昔当山に掛錫する時、輪下の龍象群を成し隊を成す。禪師没後、各々化を一方に旺んにす。歲月、其れ逝き、各自遷化し去る。何ぞ図らんや、我れ不肖。今日、高広座に登り、宗乘を挙揚すること實に畏懼す可し。当今、鵠林の宗風、幾んど地に墮つ。汝等諸人、努力して真風を挽回せよ。祖庭秋晚歎ず可し悲しむ可しと。偈有りて曰く「月槐宮に登る三五の夜、修行、供養、若為んの宗ぞ。夢中に拈得す、梅檀林分つて二分と作し、二翁に供す。」二翁は、白隱・遂翁の二師を謂う。講了の偈に曰く「韶石の關、臨濟の喝、宗風滅却す満林の霜、白狼河北、音書斷ず、丹鳳城南、秋夜長し。」師、好んで熱海に浴す。動もすれば二三句を経る。晩年に及んで、衆徒百余員、常に随つて庵居す。臘八後、復た熱海に浴す。時に体違和なり。翌年正月十四日、熱海に化す。春秋七十有一なり。師嘗て衆に示して曰く「余、嘗て行脚の時、天涯海角を遍歷すること殆ど二十年。其の間、三十余員の善知識に参見す。然るに他れ我が機鋒の鋭きを以て我を奈何ともせず。末後に鵠林老漢に撞著し、遂に三度他れに打出せらる。平生の得力毫髮許かりも用い得ず。爾来、服従すること三四年。是の時に當つて天下の能く我を打著する者、實に鵠林老漢一人のみ。我れ他の道德尊大を貴ばず。他の声名の四海に洋きを貴ばず。他の見處の古今に超過するを貴ばず。他の古人節角の諸因縁に於て一々明了、一々見徹、毫芒も遺さざるを貴ばず。他の横説豎説、獅子吼、

無畏を貴ばず。他の三百五百乃至七八百徒衆圍繞し、一佛出世の如きを貴ばず。但だ天下の老和尚、我を奈何とすること能わざるに他れ独り能く悪手脚を下し、我をして三度喫棒し、我をして進退維れ谷まり、我をして遂に大事を了畢せしむるを貴ぶ。誠に知る。此の事、極めて容易ならず。又曰く「我れ鵠林老漢に従うこと僅か四年。他の老徳、入室の時、或は協わざるを以て、故に東嶺和尚に就いて之を叩く。」又曰く「五位兼中至以上、我れ東嶺和尚に就いて之を質す。是の時、東嶺に微りせば竟に余蘊を尽くすこと能わず。」又曰く「暮雲の帰つて未だ合せざるに對するに堪えたり、遠山限りなく碧層層。此の語、容易の看を作すこと莫かれ。縦令い難透難解を透過し、三玄、五位を参得し了るも、者の境界に到ること能わず。他日必ず分明に見、得透する時節有らん。記取せよ。」又曰く「我れ天沢に住すること十年。胡床を天香閣に置き、毎夜其の上に坐す。三更自り四更に至る。一睡して便ち起きる。鐘司、木屐を屐し、樓に上り鐘を撞く。那時、已に面を洗いたる。威儀を著け、佛前に詣り晨誦す。毎々此の如し。凡そ夙興し、精神を抖擻し誦經罷る。然る後、本参の話頭を提撕せんと要す。切に忌む。光陰を空過するを。而今老いると雖も勉めん。怠らず。何んとなれば、南禅師云わく「老と雖も寧居逸体せず。」師、昔時、鵠林に在り。疎山壽塔の話に参ず。艱辛刻苦、之に久し。一日、忽然として徹見す。覚え、手に香炉を捧げて起舞す。後、依松に安居す。因つて念う、我れ鵠林に在つて柏樹子賊機の話に参見す。那時自ら思うに快徹す。今而之を念えば未穩在なり。此に於て單単体究す。一夕、寒颯俄かに起こる。林

木嘈雜、山鳴谷響す。忽然として柏樹子賊機に撞著す。趨つて庵外に出づ。疾走すること四五十歩。始めて関山の肝膽心腸を徹見したる。師、始めて鵠林に随侍す。後に東嶺に親炙す。是れを以て其の峻機妙用、大いに作家の手段有り。愚溪・行応・隱山・卓洲・関堂の五人を接得すと云う。

峨山は、白隱の法嗣となり、門下に隱山・卓洲の二神足を打出し、今日の白隱禅の伝承がこの二師の流れを承けたものである。

この峨山も、古月下の禅を承けている。三春の光顯の月仙和尚とは、円覚寺中興開山である誠拙周樗の師である月船禅慧のことである。この月船のもとで出家し、古月の法嗣である翠巖從真・大道可文に参じ、月船のもとに帰り、大事を了畢したのである。自分の参禅修行の中で、白隱以外、ほとんどの師に参じたが、白隱に参じることを峨山自身望みもせず、また、師である月船も参じさせなかったのである。たまたま白隱が江戸に來た時に、桃林寺で白隱に参じたのである。白隱に見解を呈した所、白隱に罵倒されたのである。峨山は、自分は悟つたのに自分を認めない。しかし、白隱は天下の人が大知識と認めている。そうであるならば、白隱の所には、何かがあると考え、再び参じたのである。白隱は峨山に隻手の公案を与え、参じさせたのである。白隱は、すでにこの時高齢であり、峨山は後に先に述べた東嶺円慈に参じたのである。峨山自身、その点について、五位の兼中至から先の修行は東嶺に就いて参じ、この東嶺に参じることがなかったら、余蘊を尽すことができなかったであろうと言っている。

峨山の修行は、東嶺によって完成したのである。しかし、法系では、白隠の法嗣となっているが、むしろ、東嶺が白隠にかわって、代証したと言えるのではないかと考えている。

東嶺が師の白隠にかわり、峨山を証明したということになる。

古来より「学人二十、師家四十」という語がある様に、修行に就く師家は若い方がよいと言われている。確かにそうかもしれないが、若ければ良いという程、単純なものではないとも私は思っている。

では、最後に、印可ということについて考えることにする。

白隠下の印可は、大燈国師の五条の橋の下での聖胎長養、関山国師が伊深で行った聖胎長養等に順じて、公案修行が一通り終ったあと、公案で得た境界が実地でつかえるかを見るための点検とも言うべきことがなされる。その後において、初めて師位に登るのである。これを「師家」と言うのである。その時、師より承けるのが印可状である。この印可に対する白隠の姿勢について良哉伝によって見ることにする。

華嶽寺の良哉和尚伝

師、尾州の人なり。初め日州の古月和尚に参じ契悟す。後に駿州に之き鵠林を謁す。林一見して即ち曰く「文殊来れり。」居すること数年、深く玄奥を究む。林、之を許可す。師、逸材有り。好んで詩偈を作る。林往々之と唱酬す。後に参州の華嶽寺に住す。偈に曰く「維れ長維れ短、松千樹、或いは曲或いは斜、竹一叢。許さず人來つて境会を成すを、鐘鳴つて僧は立つ夕陽の中。」又、日州に往き再び古

月を骨清堂に謁す。月、之を喜ぶ。師、偈を呈して曰く「鉄錫曾て再来を誤らず。参陽人の事、宇良哉、骨清堂上、簾を捲いて坐す、雨後の青山、雲霧開く。」月、之に和す。師、江州大圓院の請に応じて「大慧書」を提唱す。開題の偈に曰く「活捉す錦囊の獅子児、虚空背上、人と騎る。大湖三万頃の秋水、一碧渺漫月満る時。」是の時、師、始めて法を開く。闍衆四百余なり。大いに鵠林の道を振るう。蓋し鵠林の下、宗師亦多し。而して師を以つて其の先鳴と爲す。爾後三十余所の請に応じ、圓山の宗徳寺に終わる。鵠林、嘗て曰く「我、良哉を印せしこと太だ早し。是れを以つて彼、今事を済さず。若し三年を待つて然る後之を許さば則ち天下彼を奈何とするもの無し。」侍僧曰く「師、何ぞ其の早きを知つて之を許すや。」林曰く「吾れ当時只其の人の得難きを覚うるのみ。其の太だ早きを覚えざるなり」と。嗚呼、許可なる者は宗師家の当に慎むべき所なり。鵠林の明を以つて尚且つ悔みを貽すこと此の如し。況や他人に在つておや。豈に慎まざるべけんや。

良哉も、初め古月に参じ、そこで契悟したのである。その後白隠に参じたのである。この良哉は、白隠が最初に印可した人である。古月下から白隠下へ転じた人は多数いるが、良哉のように古月から白隠へ、そしてまた古月のもとに帰った人は、ほとんどいない。この良哉は、その点、まれな人である。そして、白隠下の中では、白隠が法幢を掲げた初期の弟子の一人である。

良哉が古月の所より、白隠のもとに参じた時の白隠の言葉は、「文

殊来り」と言ったのである。それからすれば、白隠にとって、良哉が参じに来た喜びは相当なものであったことが推察できる。白隠は、良哉と鍛えあげていく段階で、早く一人前にしたいと思ったことであろう。

以上、非常に簡略に数人の禅僧の伝記を読みながら、白隠禅が重視する一面と、白隠禅が、古月下で禅を学び、後に白隠下に移り、白隠禅を挙揚し、その伝統を受け嗣いで、今日に及んでいることが理解できたと考える。

古月禅は、九州より鎌倉で栄えた禅であると言える。そして、鎌倉で来朝僧によって作り上げられた鎌倉禅が、古月下の禅僧によって、鎌倉という地に於て受け継がれていったのである。この鎌倉禅は、武士の接化の中で生まれた、禅定力を重視する禅のことである。白隠のはしご禅、鎌倉のナベタ禅と呼ばれる禅である。これが古月禅の人々にうけつがれたのである。

白隠禅は、日本に伝来した禅の伝灯を、何んらかの形で伝承されていたものを、白隠及び多くの弟子達によって集められ、工夫されて、今日の禅の修行の大系が築かれていったと言える。その中に古月禅も吸収されて言った考えている。

どのような形であれ、今日まで白隠禅としての伝統が受け継がれているのは、それだけの内容と受け継ぐことのできる形態を持っているからであると考ええる。そして、その伝灯の基礎をつくりあげたのが、白隠及びその門下の人々であり、その多くの人々が、古月のもとで禅僧としての基礎教育を受けたと言える。逆に白隠禅が盛大に

なっていくことによって、古月禅の衰退が始まったと言える。

この白隠及びその門下によって作り上げられた禅をどの様に生かしていくかは、住職として第一線で活躍する人であることを認識し、布教・接化を行うべきであると考ええる。